

令和9年度 豊橋技術科学大学第三年次入学者選抜学力検査問題

一般科目（国語）

注意事項

- 一 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二 問題冊子の枚数は、表紙、草稿用紙を含めて一枚です。
- 三 問題冊子とは別に解答用紙（マークシート）が一枚あります。
- 四 問題冊子はページを切り離して使用しても構いません。
- 五 問題は大問が二問あります。全問解答してください。
- 六 試験開始の合図の後すぐに、解答用紙の所定の箇所に氏名・受験番号を記入・マークしてください。
- 七 解答は必ず解答用紙の所定の箇所にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 八 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあれば、ただちに申し出てください。
- 九 問題冊子の余白は、草稿用として使用しても構いません。
- 十 試験終了時刻まで退出してはいけません。
- 十一 問題冊子は持ち帰ってください。

(草 稿 用 紙)

【一】 次の文章を読んで、以下の問いに答えよ。

一般に、科学は合理の成り立つ世界だと考えられているようである。ア、科学として成立した分野の体系は、実験的なケン証にも耐え、その内容が論理的にも矛盾を含まない合理的な体系となっている。イ、これはでき上がってしまった科学の体系のことであって、研究の現場にあつて、でき上がりがつあるまだどつちともつかない「成果」とはちがうことが注意されねばならないと、私は考えている。研究の現場はI合理的でないというところか、むしろAな思考（こうよればの話だが）が支配する世界なのだ。誰か科学者をつかまえて、どのようにして研究テーマを見つけたか、研究へのヒントをつかむのかと質問してみたとき、それに対して、私たちに「納トク」のいく合理的な説明を立ちどころにできる人などがあるとは私には考えられない。研究が成果としてまとまり、論文に書かれてしまったあとなら、私たちは系統だった合理的な解釈について聞くことはできよう。

だが、このような解釈は、それに関わりのある研究成果がすでに、論文としてまとめられて出版され、大方の科学者に受け入れられて、科学者のコミュニティの中で「真実」とされてしまつてから、たいていの場合は与えられるのである。科学者が現実に研究でBしている現場については、こうした合理的な解釈など実際にはできはしないのである。

合理的な研究の態度から、研究へのヒントやアイデアが生まれるのだと、A一般には信じられているようだが、それは正しくないといったほうがよいだろう。このように信じられることになったのは、研究の成果をうるに至る過程の分析から導かれた推論が、研究の現場の錯綜とした雰囲気の中から、合理的な解釈にのる部分だけをとりだして見せてくれるからかもしれない。ウ、研究の過程をあとになって調べてみれば、合理的な発展の側面しか見えてこないから、こんなふうに信じられることになったのだともいえよう。

研究の現場にあつて、科学者が方法などについて意識することがきわめてまれなのだという事実を（ウ）ソウ起してみることが、科学者の思考と科学研究との関連を知る上で、大事なことだと私には考えられる。

見出し

このような見出しをつけたのには、ちゃんとした理由がある。私たちがあつる領域について研究をしていると、時にその領域で「何かひとつの仕事ができそうだ」とか、「何かがある」といった、なかば直観的ながら何となくそう感じることもある。その場合はもちろん、私たちのほうに、その領域で「何かひとつ仕事をしよう」という意欲があるのは当然のことである。もしそれがなかったら、まづ何らかの研究成果が生まれてくるなどということはないといつてよい。

エ、このような感じをつかんだところから、研究のテーマが設定され、それに伴つて生じてきたいろいろな疑問がそれから以後順々としらみつぶしに調べ上げられていく。その結果、時には、今まで研究されていなかった問題にまで行きつき、ついには、研究論文にまでまとめられるような成果が生み出されてくる。

このように考えると、研究の現場にいるときには私たちのほうに何らかの偏見というか、執念と

いか研究にあたって何かやってやろうという気持ちの有無が大事な役割を果たしていることがわかる。私たちはよく[C]でいくことが、科学の研究の態度として重要だというように聞く。しかし、研究の現場にあつては、このような態度は実際にはほとんどとられないといったほうがよいのである。

何かしらの偏見か執念をもつて研究の準備をし、勉強をしていけるのは、すでに私たちが何らかのヒントやアイデアをもっているためである。「何かできそうだ」という(三)感があるからこそ、私たちの想像力がとぎすまされ、研究の方針や勉強すべきことがらもはつきりとわかるようになり、やがては研究もある成果にまでまとめ上げられるようになっていくのである。

オ、キュリー夫人がラジウムの発見に関して書いた最初の論文を見ると、彼女はまだ、この元素を単体としてはとりだしていなかったことがわかる。ところが、彼女は強い放射能を示す物質が含まれている化合物の存在が新元素の存在を示しているのだと信じていたように、文面からは見える。このような執念というか偏見というか強い信念は、いったいどこからきたのだろうか。これには何とか合理的な説明のつけられるような解釈などないだろう。そうではあっても彼女の論文を見れば、強い気迫が感じられるし、後の輝かしい成功がIIされているようにも見えてくる。

ダーウインの進化に対するアイデアについては、メダウオー教授がふれているから、ここで述べる必要はないだろう。彼の場合も、たぐさんのデータをD、客観的な態度で見えていたわけではない。それらのデータが何かある意味をもっているにちがいない、だからそれを探さなければと彼も常に偏見にも似た考えを抱いていたのである。

このような偏見や執念に関連して抱かれたアイデアや考えは、少し拡張されたあと、ひとつの仮説にまで展開され、研究への(五)針となる。だから、こうした仮説は、仕事をすすめる上でのひとつの作業仮説となる。このような仮説の設定ができあがれば、そのあとは、それに付随したいろいろな疑問や問題をひとつひとつ調べ上げていくことが必要となる。

こんなわけで、「何かできるのではないか」とか「何とかひとつ仕事をしたい」とかいった気持ちを、研究を始める前にもつことは、Eを導く上で大きな役割を果たすことがわかる。「何かがある」とその研究領域について感じ取る能力は、理屈で説明するわけにはいかないが、研究を始める動機として、非常に大切なことなのである。研究の現場の非合理性がここに端的に現われているのだといつてよいだろう。

ここでひとつ注意しておくべきことは、執念や偏見が何でもいいからあればよいというわけではないということである。作業仮説となる考えや研究テーマが創造的なものでなければならぬのは当然のことである。これらが珍奇を狙ったりしたものであつてはいけない。創造的であることと、珍奇であることは全く別の次元の世界のことなのである。

桜井邦朋「研究の現場から」(桜井邦朋編『発見から創造へ』(地人書館、一九八七年)所収)より抜粋

問一 傍線部(ア)ゝ(オ)のカタカナ部に当てはまる漢字を一つ選び、番号で答えよ。解答番号は **1** ～ **5**。

(ア) ケン証	1	① 検	② 険	③ 研	④ 健	⑤ 建
(イ) 納トク	2	① 得	② 特	③ 徳	④ 解	⑤ 説
(ウ) ソウ起	3	① 創	② 総	③ 草	④ 想	⑤ 走
(エ) ヨ感	4	① 預	② 予	③ 余	④ 誉	⑤ 世
(オ) シ針	5	① 刺	② 指	③ 視	④ 至	⑤ 志

問二 空欄 **ア** ～ **オ** に当てはまる最も適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は順に **6** ～ **10**。

- ① たとえば ② そうして ③ しかしながら
④ 確かに ⑤ 極言するならば

問三 空欄 **I** ～ **II** に当てはまる言葉として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えよ。解答番号は **11** と **12**。

- I** **11** ① 残念ながら ② 悲しいかな ③ 必ずしも
④ いつでも ⑤ 以前は

- II** **12** ① 約束 ② 保障 ③ 保証 ④ 予見 ⑤ 想像

問四 空欄 **A** ～ **E** に当てはまる言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は順に **13** ～ **17**。

- ① 公平無私 ② 作業仮説 ③ 客観主義
④ 非合理的 ⑤ 悪戦苦闘

問五 傍線部 A 「一般」とはどのような人たちか。最も適切なものを次から選び、番号で答えよ。解答番号は **18**。

- ① 普通の科学者たち
② 特別優れている訳ではない科学者たち
③ 特殊な研究をしている科学者以外の科学者たち
④ これから科学者になることをめざしている人たち
⑤ 科学についてあまり詳しくない人たち

問六 空欄「見出し」に入る見出しとして最も適切なものを次から選び、番号で答えよ。解答番号は **19**。

- ① 何かがある——仮説を立てる
- ② 研究における直観——論文をまとめる
- ③ キュリー夫人とダーウィン——執念と偏見をもつ
- ④ 偏見と執念——アイデアを拡張する
- ⑤ 創造と珍奇——別の次元で考える

問七 次の文章について、本文の趣旨に合うものは「①」、合わないものは「②」の番号で答えよ。解答番号は **20** ～ **29**。

- 20** 多くの科学者は専門的すぎて、科学は合理的な世界だという一般的な考えを忘れがちである。
- 21** 論文が書かれる前に、科学者に合理的な解釈について質問してはいけない。
- 22** 多くの場合、合理的な解釈は、論文が書かれ、それが他の科学者に認められた後、事後的に与えられるものである。
- 23** ごく一部の優れた科学者を除いて、論文を書く前の段階で合理的な説明などできないのが普通である。
- 24** 「何かできるのではないか」とか「何かひとつ仕事をしたい」という気持ちを持つことは、科学の研究にとって非常に重要である。
- 25** 研究成果を生み出すためには、合理的な意欲や直観が不可欠である。
- 26** 執念や偏見や強い信念は、研究を始める動機として重要であり、その意味で研究の現場は非合理的な思考が支配する世界である。
- 27** キュリー夫人やダーウィンほどの優れた科学者でなければ、偏見や執念を捨てて客観的な態度で研究することは難しい。
- 28** 偏見や執念を捨てることは難しいにしても、科学者は可能な限り合理的であろうとする態度が大切である。
- 29** 研究の現場は非合理的であることを避けられない以上、作業仮説となる考えや研究テーマが、時として珍奇を狙ったものになることは避けられない。

【二】 次の文章を読んで、以下の問いに答えよ。

最近、心臓移植をめぐる本を読んで、移植患者が心臓移植によってどういう「自分ではない」状態におかれるのかを知り、言葉の世界で自分が経験していることの意味が別種の言葉で語られているという感じをうけた。

この十年間くらい、大学で学生に文章を書いてもらい、⁽¹⁾添サクする授業をしているのだが、やっていていちばん気になるのはいわゆる「言葉の乱れ」(言葉の崩れ)をどう考えるかということである。

a もう何年も前、新聞に使える漢字の⁽²⁾セイ限がきつくなり、見出しに堂々と「ろ過」とか「ラ致」とか「えん罪」という表記が現れるようになったことがある。その時わたしは、そこに「イヤな」ものを感じた。しかし、それからしばらくして学生の書く文章にも同様の「交ぜ書き」が頻出するようになった時、これを⁽³⁾ゲン格に正す、というの、I という感じをもったのである。

世間には「言葉の乱れ」を憂えていままなお「歴史的かな遣い」に⁽⁴⁾固シツする著述家もいる。若い小説家の文章が文法的になっていないと叱る評論家の文章も読んだことがある。

そういう言葉に対して、わたしは同じように、「違うな」、ちよつと硬直してるな、間違いだな、と感じる。

II

汚れた言葉への連帯感が、わたしのうちにめばえるのである。

とはいえその汚れた言葉への連帯感は、わたしをIII 場所に連れていく。学生が「ろ過」とか「えん罪」と書いてくる。中には「しゅん間」などと書いてくる学生もいる。それをわたしはどう「指導」するのがよいのか。言葉はたしかに崩れながら変化する。それでも言葉が一つの体系として生き続け、たとえば今度の『岩波国語辞典』の改訂のように辞典を⁽⁵⁾不ダンに改訂させつづけるのは、どんなに崩れても損なわれない本質が、生きた言葉の中には備わっているからである。でも、だからといって、言葉が崩れるのにまかせるのがよいなどと言えるだろうか。そんな主張は、⁽⁶⁾Aイデオロギ―で動く人ならともかく、まともな言語感覚の持ち主なら、誰もがおかしいと思うだろう。

b、「ろ過」はそのまま書かれてよいのか。同じく「しゅん間」は⁽⁷⁾座シされてよいのか。そうではなく、それらはこれは「濾過」だと、これは「瞬間」だと、そのつどわたしの手で⁽⁸⁾指テキされ、書き直されなければならないものなのか。

心臓移植をめぐる本には、こんなことが書いてある。

ふつうわたし達は、臓器移植(心臓移植)の問題は外来の臓器とこれを受けいれる移植患者の生体の間の一対一の彼我関係にあると思っている。けれども実際に心臓移植を経験した著者によると(その本というのはジャン・リユック・ナンシーの『侵入者』〔西谷修訳・以文社、二〇〇〇年刊〕である)、⁽⁹⁾B問題はもつとこみいつている。臓器移植(心臓移植)にはさらにもう一つ、別の彼我関係がともなっている。

心臓移植を行なうと、移植された心臓に対し拒絶反応が起こる。そのため、それへの医学的な対処が患者に対して必要となる。拒絶反応は、移植患者の生体の免疫システムが移植された心臓に対し、これをよそ者と同定し、攻撃をしかけることから起こる。そこでは患者の自己(我)は生体の免疫システムと同一である。でも、もし自己がその健全な自己(我)のままでしたら、移植された心臓(彼)は「拒絶」され、死んでしまう。だから、これを受け入れるには、移植患者の自己が、それまでの自分であることからはみださせられ、いわば拒絶反応を低程度にしか起こさない微弱な自己とならなければならない。そのため医師は、移植患者に薬物を投与し「免疫力低下」の医療措置を施す。免疫システムとは自己が自己を認識する生体の最も基本的な機能だから、これは、移植患者をそれまでの自己に対してよそ者にするということである。移植患者にとつての問題は、実は受入れ側としての自分がすでにそれまでの自分に対する他者の位置にあり、さまざまな副作用をとまなう薬物の投与なしには生存を^シイ持できない状況におかれることであると、この本は、わたし達に教えるのである。

〔c〕ここには他者である心臓と、それを拒絶しようとする健全な自己と、それを受け入れる、自己に対してよそ者であるような微弱な自己という三つの存在があり、その三者の間に三つの彼我関係が成立している。三つの関係とは、それぞれ、心臓〔ア〕と健全な自己〔イ〕、健全な自己〔ウ〕と微弱な自己〔エ〕、微弱な自己〔オ〕と心臓〔カ〕、の間の関係である。

〔d〕、これを言葉の世界に重ねてみれば、生きている言葉とは、ここにいる移植患者の身体のような、もう一つの微弱な自己にはかならないことがわかる。言葉の崩れはこの言葉という微弱な自己の免疫システムに、よそからやってくる移植臓器であり、言葉は、たえずそういう新しい要素を、拒絶反応で迎えつつ、その拒絶の度合いを微弱な程度に保つことで、やがて受容し、そのことを通じ、自己を更新する移植患者的な生体である。

〔e〕、だからといって、この言葉の世界の微弱な自己は、自己をもたないのではない。それは微弱な形でしつかりと自己をもつ。それはその証拠に、言葉の崩れという形でよそから^シイ質な侵入物がくると、それをよそ者とみなし、ちゃんとした(?)拒絶反応で迎える。

大事な点は、それがその力を微弱に保たれた、他者を殺さない拒絶反応だということだ。その拒絶は、外からやってくる言葉の崩れを撲滅もしなければ^シ排^シジ^ヨもしない。それは、これを拒絶反応で迎えつつ、そのことを通じ、相手から影響を受ける。自分の体質を変えつつ、それを受容し、自分自身、また新しい自己へと更新していくのである。

わたしは授業では、「ろ過」という言葉に対しては、それを使うのはよいがそれが崩れた言葉であることを意識して使うことが大事だと^シいまのところ、言っている。崩れた言葉を使うのはよい。ただそれが崩れた言葉で、崩れない言葉は別にあることを知っていることが大事だというのがわたしの言い分である。でも、「しゅん間」については、これはダメだよ、単なる無知だよ、恥ずかしいよ、などと言うので、学生からは、ちょっとおかしいんじゃないですか、論理的じゃないですよー、などと文句が出る。

むろん、論理的ではない。わたしは非論理的にいろんなことを言う。「ろ過」は条件つきで許す。

でも「しゅん間」はナンセンスだ。Dでも、ま、それでも自分でいいと思うなら、書いてごらん。
自分でも非論理的であることはわかっているのだが、でも同時に、自分は生きている言葉の理解者だと思っている。心臓移植の本は、そのわたしの言語感覚を、移植患者の微弱な自己というアイディアで力づけるのである。

加藤典洋「言葉と、移植患者の身体と」(『図書』岩波書店、二〇〇〇年)

問一 傍線部(ア)ゝ(コ)のカタカナ部に当てはまる漢字を一つ選び、番号で答えよ。解答番号は 30 ～ 39。

(ア)	添	サ	ク	30	①	作	②	削	③	策	④	咲	⑤	索
(イ)	セ	イ	限	31	①	整	②	誠	③	濟	④	制	⑤	静
(ウ)	ゲ	ン	格	32	①	源	②	幻	③	原	④	敵	⑤	限
(エ)	固	シ	ッ	33	①	疾	②	質	③	執	④	悉	⑤	失
(オ)	不	ダ	ン	34	①	談	②	段	③	断	④	彈	⑤	団
(カ)	座	シ		35	①	視	②	為	③	志	④	指	⑤	思
(キ)	指	テ	キ	36	①	摘	②	的	③	敵	④	彈	⑤	滴
(ク)	イ	持		37	①	異	②	惟	③	居	④	位	⑤	維
(ケ)	イ	質		38	①	異	②	惟	③	居	④	位	⑤	維
(コ)	排	ジ	ョ	39	①	徐	②	除	③	如	④	序	⑤	恕

問二 空欄 a ～ e に当てはまる最も適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は順に 40 ～ 44。

- | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-----|
| ① | たとえば | ② | むろん | ③ | だから |
| ④ | ところで | ⑤ | では | | |

問三 空欄 I に当てはまる言葉として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えよ。解答番号は 45。

- | | | | | | |
|---|-------|---|------|---|-----|
| ① | 面倒だな | ② | 不安だな | ③ | 嫌だな |
| ④ | 偉そうだな | ⑤ | 違うな | | |

問四 空欄 Ⅱ に入る文章として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えよ。解答番号は 46。

- ① いずれにせよ、硬直した両極端の考えの間で私は悩むのである。
- ② 何か言葉が崩れる形で生きていることへの共感のようなものがわたしを動かす。
- ③ そのような著述家や評論家と大学教員とは、果たすべき役割が違っている。
- ④ そう言う著述家や評論家自身の言葉も、いつ乱れるか分からないからである。
- ⑤ それほど日本語の「歴史的かな遣い」や文法は、複雑で難しいのである。

問五 空欄 Ⅲ に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えよ。解答番号は 47。

- ① 難しい
- ② 興味深い
- ③ 面白い
- ④ 教育的な
- ⑤ 薄暗い

問六 傍線部 A について、言葉の意味として最も近いものを次の中から選び、番号で答えよ。解答番号は 48。

- ① 浅慮
- ② 理想
- ③ 偏見
- ④ 観念形態
- ⑤ 正義正論

問七 傍線部 B について、「もつとこみいつている」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、番号で答えよ。解答番号は 49。

- ① 臓器移植には、臓器と移植患者の生体の間の一对一の彼我関係の他に、別の彼我関係が存在すること。
- ② 臓器移植には、臓器と生体の間の彼我関係に加え、言葉の本質と崩れという彼我関係が生じるということ。
- ③ 心臓移植を行うと拒絶反応が起こるため、「言葉の乱れ」が生じやすいという問題が発生しやすいということ。
- ④ 心臓移植を行うと拒絶反応が起こるため、患者に対する医学的な対処が不可避であるということ。
- ⑤ 拒絶反応においては、患者の自己(我)は生体の免疫システムと同一であることから逃れられないということ。

問八

空欄「ア」は次の①～③のいずれかが入る。それぞれ最も適切なものを選び、番号で答えよ。解答番号は順に 50 ～ 55。

- ① 彼 ② 我 ③ 彼＋我

問九

傍線部Cについて、筆者が「いまのところ」と述べている理由として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えよ。解答番号は 56。

- ① 大学を退職すると自由に自分の考えを主張することが出来るが、現在は大学教員という立場で学生に考えを伝えているから。
 ② 論理的ではないことを言っているので、少し後ろめたい気持ちがあり、それを誤魔化したいから。
 ③ 論理的ではないことを言っているので、今後も変わらない正しい考えであると断定すると学生の反感を買うから。
 ④ 崩れた言葉とは別に、崩れない言葉があることを学生にしっかり理解してもらいたいから。
 ⑤ 自分自身たえず新しい自己へと更新され続けるので、今後考え方が変わる可能性があるから。

問十

傍線部Dについて、筆者がこのように述べる理由として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えよ。解答番号は 57。

- ① 教員が絶対「しゅん間」と書いてはいけなと強く指導すると、ハラスメントになる可能性があるから。
 ② 教員にこのような言い方をされた上で、それでも「しゅん間」と書く学生はいないはずだと考えているから。
 ③ 「しゅん間」はナンセンスだという考えは非論理的であることを自覚しており、絶対禁止とまでは言えないから。
 ④ 外からやってきた言葉の崩れが自己にどのような変化をもたらしたのかを認識しつつ言葉を使うことが重要だと考えているから。
 ⑤ 「無知だよ」「恥ずかしいよ」とまで言われたにも関わらず、「しゅん間」と書く学生がどのくらいいるかを知りたいから。